

令和 5 年 6 月 5 日現在

機関番号：14501

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2022

課題番号：18K13347

研究課題名（和文）自閉症児の親におけるオンラインソーシャルサポートの実態と有効性に関する縦断的検討

研究課題名（英文）Longitudinal effects of online social support on parents of children with autism spectrum disorders

研究代表者

山根 隆宏（Yamane, Takahiro）

神戸大学・人間発達環境学研究科・准教授

研究者番号：60644523

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究はオンラインソーシャルサポートについて、自閉症児の親の利用実態やそのサポートの有効性について検討することを目的とした。第1にオンライン上の自閉症関連情報を掲載した主要なウェブサイトについて、その情報の信頼性と時間的一貫性を検討したところ、国内のウェブサイトの情報の質は低い値であった。第2に2020年と2022年で自閉症児の親のオンラインソーシャルサポートの利用実態を調査したところ、利用頻度は1割程度であることが示唆された。第3にパネル調査から、匿名他者によるオンラインサポートを利用する親ほど、ストレス反応の初期値が高く、その後も1年にわたりその差が拡大していくことが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の結果からは国内の自閉症関連ウェブサイトの情報の質や信頼性は海外よりも低いことが示唆されたため、国内のウェブサイトの情報の質や信頼性を向上していく取り組みの必要性が考えられる。また、先行研究の報告ほどは自閉症児の親は頻繁にオンライン上の匿名他者への相談行動を行っていないものの、それらのサポートの利用をすることが短期的にも長期的にも親のストレス悪化につながりうることが示唆された。このことは、ソーシャルサポートは親のストレス緩和につながりうるという従来の知見に反する結果であり、今後これらのサポートの有効性を慎重に検討していく必要性が考えられる。

研究成果の概要（英文）：The present study was to examine online social support, its actual use and effectiveness of such support among parents of children with autism spectrum disorders. First, we examined the reliability and temporal consistency of information on major websites with online autism-related information, and found that the quality of information on Japanese websites was low and the temporal consistency was moderate. Second, a survey on the actual use of online social support by parents of children with autism spectrum disorders in 2020 and 2022 suggested that the frequency of use is about 10%. Third, the panel survey showed that parents who use online support by anonymous others have higher initial stress responses, and these difference continues to increase.

研究分野：臨床心理学

キーワード：自閉症 発達障害 親 援助要請 オンライン ソーシャルサポート 精神的健康 ウェブサイト

## 1 . 研究開始当初の背景

自閉症スペクトラム障害 ( Autism spectrum disorder ; 以下 , ASD ) 児の親において , インターネットは子どもの障害や支援に関する重要な情報源・サポート源の一つである ( Grant et al., 2015 ; Reinke & Solheim, 2015 ) . 英語圏ではここ十数年で ASD 関連のサイト数が急増し ( Grant et al., 2015 ) , 障害児の親向けの情報やサポートも増加している ( Jones et al., 2013 ) . また , 国内においても民間企業や NPO 法人 , 親の会等による同様の情報サイトや交流サイトが増えている . インターネットを利用したサポートは , アクセスのしやすさやコストの低さ , 時間的・距離的な問題の解消など , 多くの利点を有するため , その利用を検討していくことは意義があるといえる .

インターネット上の情報の質に関しては様々な課題が指摘されている . Hall et al. ( 2016 ) の系統的レビューでは , ASD 児の親が利用するオンライン情報の問題点として情報の質や一貫性の問題を挙げている . 例えば , 検索結果の流動性や一貫性のなさ ( Reichow et al., 2012 ) や , 科学的根拠があることを示す引用先の欠如または誤った引用 ( Di Pietro et al., 2013 ; Reichow et al., 2013 ) , 科学的根拠に乏しく安全ではない治療法の推奨 ( Di Pietro et al., 2013 ; Grant et al., 2015b ) が報告されている . インターネット上の情報やそのソースに質の問題がある場合 , ASD 児の親にとってそれらの情報を参照することが子どもに関する適切な意思決定を助けるとはいいがたい ( Hal et al., 2016 ) . したがって , ウェブサイト上の ASD 関連情報の質を評価し , 現状を把握していくことは重要であろう .

インターネット上の情報やサポートを利用することは , ASD 児の親の養育ストレスにどのような影響をもつのだろうか . 障害児の親を対象とした質的な研究によると , ストレスの強い親がインターネット上の交流で孤独感を和らげていること ( Fleishman, 2005 ) や , インターネット上のピアグループの交流によって , 親が障害児を育てることを肯定的に意味づけしていくこと ( Huws et al., 2001 ) が報告されている . またインターネット上のコミュニティが ASD 児の親にとってピア同士で安心を感じられる安全な避難所 ( safe haven ) として位置づけられていることが質的研究で報告されている ( Reinke & Solheim, 2015 ) . しかしながら , 障害児の親のインターネット利用に関する研究は萌芽的であるため , これまでの研究ではインターネット利用の問題点よりも , 親の肯定的体験に焦点を当てる研究が多いのが現状である . 知的障害児や ASD 児の親のインターネット利用に関するレビューでは , インターネット利用の問題点として , 情報検索による時間の浪費や過った情報の問題 , インターネット上の交流による情緒的苦痛や葛藤などが挙げられているものの , 先行研究の大半がインターネット利用による肯定的体験を強調する傾向にあると論じている ( Caton et al., 2019 ) . また Caton et al. ( 2019 ) はインターネット利用が ASD 児や知的障害児の親にとってどのような問題や課題があるかに答え得るだけのエビデンスが不足していると結論づけている . 以上を踏まえると , ASD 児の親におけるインターネット利用の問題点を検討していくことが必要であろう .

そこで本研究では ASD 児の親を対象に , インターネット利用が親のストレスにどのように関連するかを検証することを目的とする . 特にインターネット特有の匿名性の高さについて焦点を当て , インターネット利用の親ストレスへの影響について検証する . インターネット上の匿名他者に対して相談行動をとり , 情緒的サポートを得ようとすることは , 質的研究からインターネット上の相談行動や交流は肯定的な側面だけでなく , 情緒的苦痛や葛藤を経験することが示唆されており , かえってストレスを高めてしまうことが考えられる . また , ASD 児の親のインターネット上の情報やサポートの利用については研究の蓄積が十分ではなく , また新型コロナウイルス感染症の流行に伴い , その利用行動にも変化がみられる可能性がある . これらの利用実態についても基礎的な資料の蓄積が必要である .

## 2 . 研究の目的

本研究の目的は以下の 3 点である . 第 1 に国内のインターネット利用者が多くアクセスすると考えられる ASD 関連のウェブサイトを出し , それらの特徴と信頼性を検討することを目的とする . 第 2 に ASD 児の親において , 新型コロナウイルス感染症流行期にオンラインソーシャルサポート利用の実態とサポートの有効性について , 精神的健康やストレスの観点から検証を行う . 第 3 にオンラインソーシャルサポートの利用が心理的ストレスの変化とどのように関連するかについて検証する .

## 3 . 研究の方法

### ( 1 ) 自閉症関連ウェブサイトの情報の質

#### ウェブサイトの選定

2020 年 11 月に検索エンジン Yahoo! JAPAN ( 以下 , Yahoo ; www.yahoo.co.jp/ ) および Google ( www.google.com/ ) で ASD 関連用語を検索し , ヒットしたウェブサイトを検討した . 本研究では検索に使用する語を「自閉傾向」「自閉症」「自閉スペクトラム症」「自閉スペクトラム障害」「広汎性発達障害」「自閉症 治療」「自閉症 療育」「自閉症 支援」とした . 上記の 2 つの検索エンジンにおける 8 つのキーワードについての検索結果から上位 30 サイトを抽出した . 480 サイトの

うち、出現回数が1回または2回のを削除し、26 サイトが残った。そのうち、PDF 資料(3 サイト)や研究成果のプレスリリース(1 サイト)、学会サイト(1 サイト)を除き、最終的に21 サイトを分析対象とした(表 1)。なお、検索型広告や連動型ニュース、雑誌記事のページは含めなかった。

#### 検討のための指標

**ウェブサイトの特徴と情報の信頼性の検討** 抽出された21 サイトについて評定者が各ウェブサイトを開覧し、同ドメイン内の全ウェブページを開覧した。梅垣(2015)を参考に下記に述べる指標を用いて評定した。発達障害支援を専門とする研究者2名が独立して評定した。ウェブサイトの情報の信頼性を評定するために、DISCERN(Charnock et al., 1999)の日本語版(Batchelor & Ohya, 2009)を用いた。DISCERNは治療・援助の選択に関する文字情報の評価尺度であり、情報発信の目的の明確さ、情報の正確さ、タイムリーさ、バイアスのなさ、カバーする範囲などに関する15項目を5件法(1:いいえ~3:部分的には~5:はい)で評定した。得点が高いほど情報の信頼性が高く、また治療・援助に関する豊富な選択肢を公平に提示していることを表す。

### (2) オンラインソーシャルサポート利用の実態

#### 調査手続き

2回にわたって横断調査を行った。一つ目は2020年8月から10月にかけて特別支援学校や発達障害児の親の会に質問紙の郵送、またはオンラインアンケートフォームのリンク先を記載した調査依頼文を配布した。その結果、ASDのある子どもをもつ親70名の回答が得られた。対象者の性別は父親19名(27.14%)、母親51名(72.86%)、平均年齢は46.43( $SD=6.69$ )、子どもの性別は男子53名(75.71%)、女子17名(24.29%)、平均年齢14.36歳( $SD=6.08$ )歳であった。

次に2022年にA市内の児童発達支援事業所、放課後等デイサービス事業所に依頼し、支援を利用している親にオンラインアンケートフォームのリンク先を記載した調査依頼文を配布した。その結果、ASDのある子どもをもつ親299名の回答が得られた。対象者は父親36名(12.04%)、母親263名(87.96%)、平均年齢は41.51( $SD=5.69$ )であった。子どもの性別は男子239名(79.93%)、60名(20.07%)、平均年齢は8.55( $SD=3.61$ )歳であった。

#### 調査内容

a) から b) については共通して調査を実施した。c) は2020年調査においてのみ、d) は2022年調査においてのみ実施した。

a) インターネット利用：オンラインソーシャルサポート利用行動項目(山根, 2019)を使用した。インターネット上の匿名他者に対して情動的サポートと情緒的サポートの利用を測定するものである。前者は「情報の検索・閲覧行動」であり、子どもの障害や支援場所に関する検索行動とサイトの閲覧について6項目、後者は「匿名他者への相談行動」であり、自身のメンタルヘルスの問題や子どもの問題の相談について3項目からなる。「最近のあなたのインターネット上の各行動の頻度を教えて下さい」と教示し、回答者自身の各項目の行動頻度について6件法(1:全くなかった~6:毎日あった)で測定した。

b) WHO-Five Well-being Index (WHO-5; WHO, 1998)の日本語版(Awata et al., 2007)を使用した(5項目)。最近2週間の状態について「いつも(5点)」から「まったくない(0点)」の6件法で回答を求めた。

c) ストレス反応：Stress Response Scale-18(以下SRS-18; 鈴木ら, 1997)を使用した。「抑うつ・不安」「不機嫌・怒り」「無気力」の3因子、18項目から構成される。障害のある子どもの育児において、回答者自身がここ2,3日に経験した感情や行動の状態にどれくらいあてはまるかを4件法(0:全くちがう~3:その通りだ)で回答を求めた。

d) うつ・不安状態 うつや不安状態を測定する指標である Kessler Psychological Distress Scale (Kessler et al., 2002)の日本語版(Furukawa et al., 2008)を用いた(以下、K6)。過去30日間における気分状態を問う6つの質問項目から構成され、「4:いつも」から「0:全くない」の5件法で回答を求めた。

### (3) オンラインソーシャルサポートの縦断的効果

#### 調査手続きと調査対象者

ASD児の親を対象としたパネル調査のデータについて再分析を行った。2016年7月にインターネット調査会社が保有するモニターで、事前調査でASD児をもつと回答した親を対象に調査会社を通じたインターネット調査をおこなった(T1)。さらにそのうち、子どもの診断名を自由記述で回答を求めたところ具体的なASDに含まれる診断名を回答した者、かつ子どものASD特性がAutism Spectrum Screening Questionnaire(以下、ASSQ; Ehlers et al., 1999)の日本語版短縮版(伊藤他, 2014)のカットオフ値5点以上を満たす者を対象とした。その後、6ヵ月後、1年後に追跡を行った(T2; T3)。最終的に292名を分析対象者とした。調査依頼時に調査の趣旨と対象者、プライバシーの保護、参加にあたっての自由意志の保証、回答の取り扱い範囲等の倫理的配慮事項について説明した。以上の説明について同意する場合のみ回答ページに進むように説明を行った。調査対象者は父親103名(35.27%)、母親189名(64.73%)、平均年齢は41.61( $SD$

= 7.06) 歳であった。子どもの性別は男子 228 名 (78.08%) , 女子 64 名 (21.92%) であった。平均年齢は 9.93 ( $SD = 4.34\%$ ) であった。

#### 調査内容

a) ストレス反応: SRS-18 (鈴木ら, 1997) を使用した。「抑うつ・不安」「不機嫌・怒り」「無気力」の 3 因子, 18 項目から構成される。障害のある子どもの育児において, 回答者自身がここ 2, 3 日に経験した感情や行動の状態にどれくらいあてはまるかを 4 件法 (0: 全くちがう~3: その通りだ) で回答を求めた。

b) ソーシャルサポート: ソーシャルサポート尺度 (山根, 2013) を使用した。5 つのサポート源 (配偶者, 両親, 医療機関・療育機関の先生, 親の会で知り合った人, インターネット上の匿名の他者) について対象者がいると回答したサポート源ごとに, 情緒的サポート (e.g., 「元気づけてくれる」) や道具的サポート (e.g., 「子どもについて相談に乗ってくれ, 話し合ってくれる」) に関する期待度を 4 件法 (1: 絶対にちがう~4: きっとそうだ) で回答を求めた。

c) ASD 特性: Autism Spectrum Screening Questionnaire (以下, ASSQ; Ehlers et al., 1999) の日本語版短縮版 (伊藤ら, 2014) を使用した。計 11 項目について回答者の子どもが ASD に典型的な特徴にあてはまる程度を 3 件法 (いいえ, 多少, はい) で回答を求めた。

d) 有益性の発見: 発達障害児者をもつ親の Benefit Finding 尺度 (以下, BFS-DDP; 山根, 2014) を使用した。計 18 項目について障害のある子どもをもつことで何か得られたと感じることがどのくらいあてはまるかを 6 件法 (0: 全くあてはまらない~5: 非常によくあてはまる) で回答を求めた。

e) 意味理解: 意味理解尺度 (山根, 2015) を使用した。障害のある子どもをもつことに対する意味理解の達成度を 5 件法 (0: 全くあてはまらない~4: 非常によくあてはまる) で回答を求めた。

## 4. 研究成果

### (1) 自閉症関連ウェブサイトの情報の質

#### 評定者間信頼性の検討

DISCERN の級内相関係数 (ICC(2, 1)) は  $ICC = .79$  であり, 十分な級内相関係数がみられた。そのため, その後の検定では DISCERN は評定者間平均値を用いることにした。

#### ウェブサイトの特徴と情報の信頼性

記述的特徴 分析対象とした 21 のウェブサイトの記述的情報を種類別で見ると, 企業・会社が最も多く (57.14%), 次に非営利組織・学会 (19.05%), 政府機関 (14.29%) の順に多かった。特徴としては, 医療関連 (47.62%), 組織による運営 (85.71%), 専門家による管理 (57.14%), 専門家の関与 (90.48%), 商品・サービスの宣伝 (66.67%) が多くみられた。サイトの内容を第三者機関が内容保証をしているサイトはみられなかった。

ウェブサイトの情報の信頼性 DISCERN 得点と先行研究の結果とを  $t$  検定で比較した。DISCERN 得点については, オーストラリアの自閉症関連ウェブサイトを検討した Grant et al. (2015a) の結果 (平均値 = 46.48,  $SD = 14.33$ , 範囲 = 23.00 - 67.50) よりも平均値が低く, 分布のばらつきが少なかった。Hargrave et al. (2006) の DISCERN の基準に照らすと, 先行研究の情報の信頼性が fair (39-50) であるのに対して, 本研究のウェブサイトは poor (27-38) と評価された。下位項目の平均値を Grant et al. (2015a) の結果とウェルチの検定で比較したところ 14 項目に有意な差がみられた。特に効果量が大い (Hedges'  $g > .80$ ) 項目をみると, 情報源の明確さ ( $t(39.86) = 3.61, p < .001$ , Hedges'  $g = 1.11$ ), 付加的な情報源やサポートの詳細 ( $t(38.97) = 5.31, p < .001$ , Hedges'  $g = 1.64$ ), 不確かな領域についての言及 ( $t(32.86) = 4.84, p < .001$ , Hedges'  $g = 1.49$ ), 各治療の利点 ( $t(27.74) = 3.55, p < .001$ , Hedges'  $g = 1.10$ ), 治療をしなかった場合に何が起こるか ( $t(26.41) = 2.99, p < .05$ , Hedges'  $g = .92$ ), 治療の選択による全般的な生活の質への影響 ( $t(38.76) = 3.07, p < .001$ , Hedges'  $g = .83$ ), 治療の選択の可能性 ( $t(36.27) = 4.43, p < .001$ , Hedges'  $g = 1.37$ ), 意思決定共有の支援 ( $t(34.92) = 4.31, p < .001$ , Hedges'  $g = 1.33$ ) について本研究の平均得点が低かった。唯一, 目的に沿った情報を提示できているかについては本研究の平均得点が高かった ( $t(34.71) = 2.78, p < .05$ , Hedges'  $g = .86$ )。

DISCERN の基準を踏まえたところ, 主要な ASD 関連ウェブサイトの情報の信頼性は poor と評価された。また, DISCERN の下位項目をみると, 情報の根拠・ソース, 情報の不確かな領域, 各治療の利点, 治療をおこなわなかった場合に起こること, 治療によって期待される生活の質への影響, 治療選択の可能性, 意思決定支援に関する情報の不足がみられた。このような情報は, サイト閲覧者が十分な情報を得て意思決定を行う上で重要な要素であり (Grant et al., 2015a), ASD やその治療・支援に関する情報をウェブサイト上で提示する際は必ず含むべきであろう。特に治療や支援の方法を推奨する際に, 執筆者情報や情報源の開示によりアカウンタビリティを高めることや, DISCERN などのツールでウェブサイトの内容を評価して改善する必要があるだろう。支援者や専門家は信頼できるウェブサイトのリストを当事者や家族に提供することや, そもそもウェブサイトの情報の信頼性にはばらつきがあることを当事者や家族に周知していくことも求められよう。また別のアプローチとして, 当事者や家族にウェブサイトの情報の信頼性を意識し, 判断してもらうことも求められるかもしれない。例えば, Grant et al. (2015a) は DISCERN の短縮版である 6 項目からなる Brief DISCERN (Khazaal et al. 2008) を用いて ASD 児者の親がウェブ

サイトの情報の信頼性を判断する方法を提案している。このようなツールを利用することや、ウェブサイトの情報の取捨選択をするための啓発なども求められるだろう。

## (2) オンラインソーシャルサポートの実態と横断的検討

### オンラインソーシャルサポートの利用実態

情報の閲覧・取得行動についてはコロナ禍であった 2020 年の利用頻度は 2022 年の結果と比較して低い傾向にあった。このことは 2020 年調査のサンプルが子どもの年齢が平均で 14 歳であるなど、調査対象者が障害や支援に関する情報を相対的に必要としていない背景が関係していると考えられる。インターネット上の匿名他者への相談については、2%から 12%と幅があるものの、利用者は少ない傾向にあった。このことは山根(2019)の調査結果ではおよそ 2 割程度の利用結果であったが、本調査の結果を踏まえると先行研究で考えられているよりも実際の利用頻度は低いのかもかもしれない。特に今回の調査ではインターネット上の匿名他者に絞って調査をしているが、友人や知りあいなどを含めるとさらにオンライン上の相談行動の頻度は高くなることが予想される。

### オンラインソーシャルサポートとストレスの横断的検討

子どもの年齢を統制変数とした偏相関分析の結果、2020 年調査データでは、情報の閲覧・取得行動と匿名他者への相談行動はストレス反応とは有意な正の相関がみられたが、精神的健康とは有意な相関はみられなかった。また、2022 年調査データでは、同様に情報の閲覧・取得行動と匿名他者への相談行動は抑うつストレスと有意な正の相関がみられたが、精神的健康とは有意な相関がみられない、もしくは有意であるものの非常に低い相関係数であった。このことは ASD 児を育てることによるストレスとオンラインソーシャルサポートの利用行動と相互関係がみられることを示唆するものであるといえる。先行研究ではオンライン上のサポートの利用がストレス反応と関係することが示されており、この結果と一致するものであった。必ずしもオンライン上にサポートを求めることが、ストレス低減につながるわけではないことを示唆するものであり、今後も慎重な解釈が求められる。

## (3) オンラインソーシャルサポートの縦断効果

### ストレス反応の変化の軌跡

3 時点のストレス反応得点を観測変数とし、切片と傾きを潜在変数とする潜在成長モデルによる分析を行ったところ、適合度は良好であった (CFI = 1.00, RMSEA = .00, SRMR = .01)。切片の平均値は 17.33 であり、分散は有意であり個人差がみられた。傾きの平均値は -.18 であり 1 年間で 2.1 ポイント低下することが示された。しかしながら、傾きの分散は有意ではなく個人差はみられなかった。

### ストレス反応の変化に与える影響

切片と傾きを従属変数とし、各要因を独立変数とした潜在成長モデルによる分析を行ったところ、適合度は良好であった (CFI = .98, RMSEA = .05, SRMR = .01)。親の性別は切片に有意な正の関連がみられ、T1 時点で父親よりも母親のストレス反応が高く、1 年後までその差は持続していた。ASD 特性は切片と正の関連がみられ、T1 時点で ASD 特性が高いほどストレスは高く、その差は持続していた。オンラインソーシャルサポートは切片と有意な正の関連がみられ、傾きに負の関連がみられたことから、T1 時点でオンラインソーシャルサポートの利用がストレス反応を高め、さらにその差が拡大することが示された。配偶者のサポートと有益性の発見は切片と有意な負の関連がみられ、T1 時点で両者がストレス反応を低め、その程度は持続していた。医療機関・療育機関のサポートは傾きと有意な負の関連がみられ、ストレス反応の低下を抑制していることが示された。以上より、他の要因の影響を統制した上でも、匿名他者によるオンラインサポートは短期的にも長期的にもストレス悪化につながることを示唆する結果であり、今後このようなサポート利用の有効性について慎重な検討が必要であろう。

Table 1 ストレス反応の切片と傾きに対する各要因の影響関係

	SRS-18					
	切片			傾き		
	B	$\beta$	p	B	$\beta$	p
親の性別	3.533	.198	.005	-.002	-0.002	.986
親の年齢	-1.478	-.174	.006	.027	0.064	.651
子どもの性別	.013	.001	.991	-.068	-0.067	.501
ASD特性	1.897	.223	.000	.015	0.036	.720
オンラインサポート	2.023	.237	.001	-.099	-0.236	.048
配偶者サポート	-1.251	-.147	.036	.067	0.159	.205
医療機関・療育機関サポート	.009	.001	.987	-.115	-0.274	.023
親の会サポート	.953	.112	.130	-.022	-0.053	.675
専門機関サポート	.570	.067	.346	.068	0.163	.149
有益性の発見	-2.668	-.313	.000	-.027	-0.064	.728
意味理解	-.399	-.047	.526	.059	0.141	.468
R <sup>2</sup>		.333	<.000		.145	.171

$\chi^2(11) = 129.360, p < .001$   
CFI = .978, RMSEA = .049, SRMR = .014

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 5件／うち国際共著 1件／うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 山根隆宏, 大塚あかり, 谷口あや, 原田新	4. 巻 19
2. 論文標題 自閉症関連ウェブサイトにおける情報の質と検索順位の一貫性の検討	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 自閉症スペクトラム研究	6. 最初と最後の頁 15-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 山根隆宏	4. 巻 19
2. 論文標題 自閉症スペクトラム障害児をもつ親におけるインターネット利用と心理的ストレスの関連	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 自閉症スペクトラム研究	6. 最初と最後の頁 5-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Yamane, T	4. 巻 25
2. 論文標題 Longitudinal Psychometric Evaluation of the Developmental Disorder Parenting Stressor Index with Parents of Children with Autism Spectrum Disorder	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Autism	6. 最初と最後の頁 2034-2047
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1177/13623613211009349	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 ポーター倫子, キャサリンブランド, 山根隆宏, 森本佳奈, ヤナボージー	4. 巻 19
2. 論文標題 就学前の自閉スペクトラム症児の母親における育児ストレス 質的データ による日米比較	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 自閉症スペクトラム研究	6. 最初と最後の頁 23-31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 山根隆宏	4. 巻 13
2. 論文標題 自閉症スペクトラム障害児者をもつ親のオンラインソーシャルサポート利用の実態と関連要因	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要	6. 最初と最後の頁 73-80
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Takahiro Yamane	4. 巻 63
2. 論文標題 Effects of social support and meaning-making in trajectories of psychological stress among parents of children with autism spectrum disorder	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Journal of Intellectual Disability Research	6. 最初と最後の頁 885
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 5件)

1. 発表者名 Yamane, T.
2. 発表標題 Evaluation of Psychometric Properties of Benefit Finding Scale in Developmental Disorder Parenting
3. 学会等名 ICP2020+ (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 鈴木田英里・山根隆宏
2. 発表標題 発達障害児をもつ親の心理的危機に家族レジリエンス及び認知的評価が与える影響の検討
3. 学会等名 日本心理臨床学会第40回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 鈴木田英里・山根隆宏
2. 発表標題 発達障害児をもつ父母ペアにおける養育ストレス，認知的評価及び家族レジリエンスと心理的危機との関連
3. 学会等名 日本発達心理学会第33回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Loveland, K, Porter, N, Morimoto, K, Yamane, T, Posey, Y
2. 発表標題 A comparison of parenting stress in mothers of children with autism between Japan and the U.S.: A qualitative analysis of interviews with mothers
3. 学会等名 INSAR2020 (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山根隆宏
2. 発表標題 自閉症スペクトラム障害青年をもつ親の障害を巡る葛藤と支援
3. 学会等名 日本特殊教育学会第29回大会自主シンポジウム 「青年期発達障害者の内面的世界を大切にした支援(3)」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山根隆宏
2. 発表標題 自閉症スペクトラム障害児の親の援助要請の関連要因の検討
3. 学会等名 日本心理学会第83回大会
4. 発表年 2019年



1. 発表者名 山根隆宏
2. 発表標題 障害の意味づけの観点による発達障害児の家族支援
3. 学会等名 自主シンポジウム「障害のある子どもと家族の複合的な困難から考えるこれからの親支援とは 『障害受容論』を超えて、新たな視座を提供する」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山根隆宏
2. 発表標題 自閉スペクトラム症児の親のストレスに対する有益性発見の効果 - 縦断データに基づく中核的信念の揺らぎによる調整効果の検討 -
3. 学会等名 日本心理臨床学会第38回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山根隆宏
2. 発表標題 発達障害児の親のエンパワメント 障害を巡る葛藤とオンラインサポートに着目して
3. 学会等名 日本発達心理学会第30回大会自主シンポジウム「発達障害児を支援する地域や家族の力をどのように高めるか」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Taniguchi, A. & Yamane, T.
2. 発表標題 Education students' attitude toward children with attention-deficit/hyperactivity disorder: Relationship with empathy
3. 学会等名 ISPA2018 abstract book, 76 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yamane, T. & Taniguchi, A.
2. 発表標題 Gender and Age Difference in Trajectories of Parenting-related Stress Among Parents of Children with Autism
3. 学会等名 ISPA2018 abstract book, 76 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yamane, T. & Yamaguchi, M.
2. 発表標題 Effects of online social support on psychological stress response among parents of children with autism spectrum disorders
3. 学会等名 ISSBD2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

神戸大学大学院人間発達環境学研究科山根研究室 <a href="http://www2.kobe-u.ac.jp/~tyamane/">http://www2.kobe-u.ac.jp/~tyamane/</a>
---

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------